

[果樹部門 令和2年度 指導参考資料]

事項名	りんごのオウトウハダニの特徴と薬剤感受性		
ねらい	近年、慣行防除園で発生がなかったオウトウハダニがみられている。リンゴハダニと混同されることがあるため、特徴を示すとともに、薬剤感受性を明らかにしたので、参考にする。		
指導参考内容	<p>1 生態の概要と発生観察の要点</p> <p>(1) 越冬 雌成虫が粗皮下や枝幹の割れ目などで越冬する。越冬雌成虫の体色は朱色である。</p> <p>(2) 活動 越冬成虫は5月頃から活動を開始する。葉に細い糸を張りめぐらして寄生し、葉を吸汁加害する。ナミハダニやリンゴハダニに比べて極めて集合性が強い。青森県では年間5～6世代経過するといわれる。</p> <p>(3) 形態的特徴 体色は深紅色で、リンゴハダニにみられる背面の白いコブはない。卵は乳白色～淡黄色である。</p> <p>(4) 被害 主に葉の裏側を吸汁加害する。発生が多くなり、加害が著しくなると、葉裏が褐変したり、排泄物などで汚れる。また、葉の表側から見た葉色が白っぽく抜けるようになる。発生が甚大になると落葉することがある。</p> <p>(5) 寄主植物 りんご、もも、なし、おうとう、うめ、さくらなどのばら科植物</p> <p>2 薬剤による防除の要点 発生が多い場合は、「ハダニ類」に登録のある薬剤を散布する。ただし、コロマイト乳剤は6月下旬まで、オマイト水和剤は7月下旬までの使用を避ける。</p>		
期待される効果	近年、発生が散見されているオウトウハダニを的確に診断し、防除できる。		
利用上の注意事項	<p>1 本資料は令和元年11月19日現在の農薬登録内容に基づいて作成した。</p> <p>2 農薬を使用する場合は、必ず最新の農薬登録内容を確認して使用者の責任のもとに使用すること。</p> <p>「農薬情報」(<a href="http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/">http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/</a>)</p> <p>「農薬登録情報提供システム」(<a href="http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm">http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm</a>)</p> <p>また、短期暴露評価の導入により使用方法が変更された農薬は、登録内容の変更前であっても、変更後の使用方法で使用すること。</p>		
問い合わせ先(電話番号)	りんご研究所 病虫部 (0172-52-2331)	対象地域及び経営体	県下全域のりんご作経営体
発表文献等	令和元年度 りんご研究所試験研究成績概要集(りんご)		

【根拠となった主要な試験結果】



写真1 オウトウハダニ



写真2 リンゴハダニ



写真3 オウトウハダニの多発葉を表から見た様子

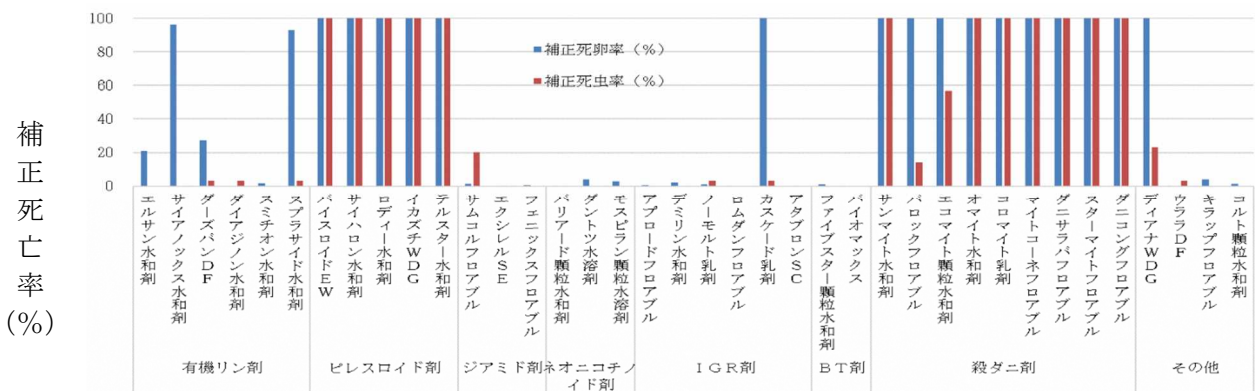


図1 オウトウハダニに対する各種殺虫剤の影響 (令和元年 青森りんご研)  
 (注) 現地の慣行防除園から採取した個体群を供試。さくらの葉を用いたリーフディスクで成虫及び卵を対象に薬液を散布。成虫試験では処理2日後、卵試験では処理10日後に死亡数を計数し、水処理区の死亡率に基づいて補正死虫率及び補正死卵率を算出した。試験は3反復行った。

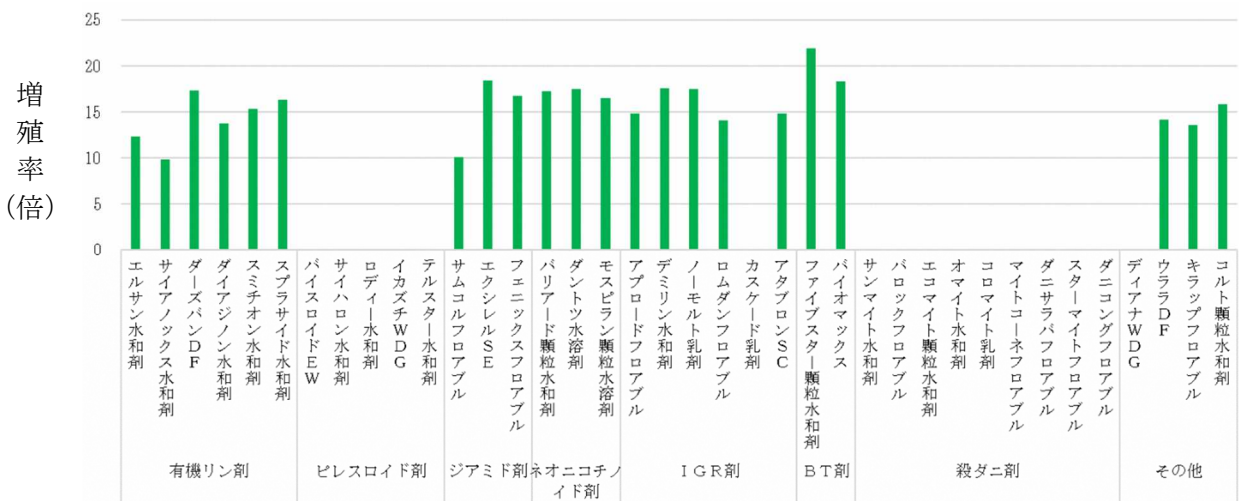


図2 各種殺虫剤を処理後のオウトウハダニの増殖率 (令和元年 青森りんご研)  
 (注) 成虫試験の調査後に飼育を継続し、処理10日後に生存幼虫及び生存若虫の数を計数した。試験開始時の成虫数に対する幼虫数及び若虫数の比率を算出した。